

編者・牟田都子さんによる 『贈り物の本』著者紹介

贈り物をめぐる記憶を持ち寄って編んだ
アンソロジー『贈り物の本』。
本書に寄稿してくださった37人の書き手について、
牟田都子さんが紹介します。



『動くとき、動くもの』(講談社、2002年)は忘れがたい一冊。この『オーライ ウトーリ ひなた猫』(春陽堂書店)は、三軒茶屋の猫本専門店キャツミヤウブックスでサイン本を手に入れることができます。

文筆家の
青木奈緒さん



『ほんのちょっと当事者』『元気じゃないけど、悪くない』(共にミシマ社)や最新作の『相談するってむずかしい』(細川詔々さんとの共著、集英社)を、私は「自分」を掘り下げていくノンフィクションとして読みました。

編集・ライターの
青山ゆみこさん



Twitterを始めた2011年当時、この場所に浅生さんがいてくださったことで、私は個人的にとても助けられました。最新刊の『選ばない仕事選び』(ちくまプリマ一新書)における「仕事」の定義は、子どもも大人も必読。

作家の
浅生鴨さん



安達さんの著作や活動は、『私の生活改善運動』(三輪舎)のように自身に潜っていく面と、『とりあえず話そう、お悩み相談の森』(エムディエヌコーポレーション)のように他者に開かれた面とが共存している、そこに惹かれます。

作家の
安達茉莉子さん



『舞台のかすみが晴れるころ』(ちいさいミシマ社)は、能について、舞台についてという以上に「ことば」についての隨筆集であると私は読みました。「みんなのミシマガジン」の連載「舞台の上でみる夢は」もぜひ。

能楽師ワキ方高安流の
有松遼一さん



自主制作と商業出版を行き来しながら書き続けてきた植本さんの『書く人の秘密 つながる本の作り方』(太田靖久さんとの共著、双子のライオン堂出版部)は個人で本を作る人必携の一冊と思います。

写真家の
植本一子さん



文学や言葉の「力」(というものがあるとして)について語ってくださいと求められたなら、私はこの本を差し出すと思います。『痛いところから見えるもの』(文藝春秋)

文学紹介者の
頭木弘樹さん



辞書編纂者の飯間浩明さんとタッグを組んだ「日本語 どんぶらこ」は毎日小学生新聞の連載。小学生で金井さんの絵がそばにあるなんて、うらやましい!『ことばは変わるよどこまでも』(毎日新聞出版)

文筆家・イラストレーターの
金井真紀さん



第35回Bunkamuraドウマゴ賞を受賞した『ロッコク・キッチン』(写真一之瀬ひろ、講談社)は、同名のドキュメンタリー映画が2026年2月に公開予定。待ち遠しい限りです。

ノンフィクション作家の
川内有緒さん



ときどき「何の本かわからないけれどとにかく読んだほうがよさそうだ」と胸がざわざわする本に出会いますが、『わたしを空腹にしないほうがいい』はその一例です。『日記の練習』(NHK出版)は装幀(佐々木暁)に驚嘆した一冊。

作家の
くどうれいんさん



日記を書くとは世界をよく見る練習で、書けるようになりたかったら書き続けるしかないということを私は古賀さんはじめ日記の書き手から学びました。

古賀及子『私は私に私が日記をつけていることを秘密にしている』(晶文社)

エッセイストの
古賀及子さん



9年越しの書き下ろし小説『けんちゃん』が扶桑社から2026年1月に刊行予定とのことで、待ち切れない気持ちを、各所への寄稿を読んでなだめています。「せっかく病気になったので』『絶不調にもほどがある!』(BREWBOOKS)

作家、エッセイストの
こだまさん



ASIAN KUNG-FU GENERATIONのギター・ボーカルであり、『朝からロック』『青い星、此處で僕らは何をしようか』など多数の著作を持つ書き手でもあります。私は『INU COMMUNICATION』(ぴあ)のような作品もこっそり覗覦しております。

ミュージシャンの
後藤正文さん



周囲にも『ニューヨークで考え中』の愛読者多数。個人的には『不思議というには地味な話』がグラシン紙で巻かれていた頃から、近藤さんの文章のファンでした。

近藤聰乃『一年前の猫』(ナナク社)

マンガ家、アーティストの
近藤聰乃さん



私が初めて斎藤さんのお仕事に接した『ギリシャ語の時間』(ハン・ガン、晶文社、2017年)の刊行時を思い出すと、いまの書店の韓国文学の棚には隔世の感があります。

斎藤真理子『なむ』の来歴』(イースト・プレス)

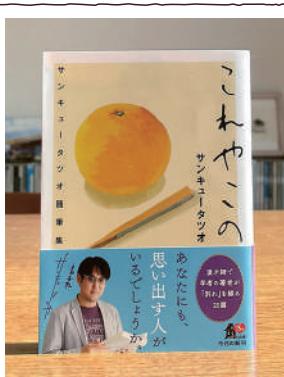
韓国語翻訳者の
斎藤真理子さん



わが家にはジュンコさん(ご本を読むと、ついこうお呼びしたくなってしまう)の小さな小さな絵がいくつかあります。欲張りですが、見るたび増やしちゃうから。

佐藤ジュンコ『マロン彦の冒險』(ちいさいミシマ社)

イラストレーターの
佐藤ジュンコさん



『国語辞典を食べ歩く』など辞書に関するご著書や番組でもおなじみですが、この一冊はもっと読まれていいと思っています。

『これやこの サンキュータツオ隨筆集』

(角川文庫)

漫才師「米粒写経」、
東北芸術工科大学准教授の
サンキュータツオさん



白川さんの言葉はいつも身体を通出てきたたしかな実感に根を張っていて、自分もこんなふうに書きたいものだと読むたび思います。

白川密成『マイ遍路 札所住職が歩いた四国八十八ヶ所』(新潮新書)

愛媛県、栄福寺(真言宗)住職の
白川密成さん



略歴やご著書について私があれこれ語るより、この本を読んでいただくのが一番だと思います（すでにお読みになった方なら賛同してくださいますよね）。願・映画化。

鈴木智彦『ヤクザときどきピアノ 増補版』(ちくま文庫)

フリーライターの
鈴木智彦さん



高橋さんが主催されたイベントで、参加者全員でささやかな贈り物交換をしたこと、この本を作りながら何度も思い出していました。

高橋久美子『いい音がする文章 あなたの感性が爆発する書き方』(ダイヤモンド社)

作家・作詞家・農家の
高橋久美子さん



武田さんの言葉を読むと「よく言ってくださった」という気持ちになるのと同時に、そうして溜飲を下げているだけではいけないのだろうなという気持ちにもなります。

武田砂鉄『いきりの構造』(朝日新聞出版)

ライターの
武田砂鉄さん



武塙麻衣子さんが作家活動を始めたのは2023年、それよりも前に日記ZINEで私は武塙さんの言葉と出会っていたのだとは、この本を作っている最中にわかったことでした。2026年は新著が3冊(!)刊行予定。

武塙麻衣子『酒場の君』(書肆侃侃房)

作家の
武塙麻衣子さん



田尻さんの最初のご著書である『猫はしっぽでしゃべる』の装画は、紙版画作家の坂本千明さんによるもの。お店に飾られている原画を見に、また熊本を訪ねたいです。

田尻久子『猫はしっぽでしゃべる』(ナナロク社)

橙書店 オレンジ店主の
田尻久子さん



辻山良雄さんが東京・荻窪に新刊書店「Title」を開いて、来年で10年になりますね。『しぶとい十人の本屋』に登場する本屋の中で、私がまだ行ったことのないのは3つ。いつかと思っていないで行かなければ。

辻山良雄『しぶとい十人の本屋』(朝日出版社)

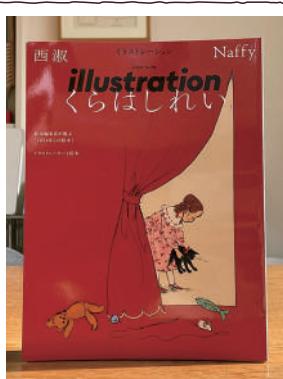
本屋Title店主の
辻山良雄さん



web連載「コアラ日記」のファンで、名久井さんの文章をもっと読みたいたと思っていた。名久井さんのデザインがどのように生まれるかは、下記の本をぜひ。

『現代日本のブックデザイン史 1996-2020』(誠文堂新光社)

ブックデザイナーの
名久井直子さん



書籍の装画も多数手がけておられます
が、先日東京で開催された個展で見た
立体作品も忘がたいものでした。

『イラストレーション』No.245(特集くらはし
れい、西淑、Naffy 玄光社)

イラストレーター、画家の
西淑さん



本を作るとは、編集者や著者のみならず、デザイナー、印刷所、製本所、物流、そして書店との協働なのだと、私は日野さんから教わりました。

日野剛広『本屋なんか好きじゃなかっ
た』(十七時退勤社)

ときわ書房志津ステーションビル店店長の
日野剛広さん



タイムトラベル同人誌『超個人的時間旅行』にお説いてくださいたとき、きわめて有能な編集者としてのお顔も知ることになりました。

藤岡みなみ『ぼちぼち』(nululu)

文筆家、ラジオパーソナリティ、
ドキュメンタリー映画プロデューサーの
藤岡みなみさん



『言葉なんていらない?』の初回印刷分に封入されている「あいだ新聞」には、今回書いていただいたエッセイの前日譚のようなお話を載っています。
古田徹也『言葉なんていらない? 私と世界のあいだ』(創元社)

哲学者の
古田徹也さん



初の歌集を作るにあたり、「未踏の地には一〇〇〇本ノック」の心構えでのぞんだと書かれていて、尊敬の念を新たにしました。
美村里江『たん・たんか・たん 美村里江歌集』(青土社)

俳優・エッセイストの
美村里江さん



2020年刊行の『兄の終い』が『兄を持ち運べるサイズに』のタイトルで映画化され、いよいよ公開ですね。いつか村井さんの訳した翻訳書を持ち寄って一押しをプレゼントし合う読書会がしたい。
村井理子『兄の終い』(CEMH文庫)

翻訳家の
村井理子さん



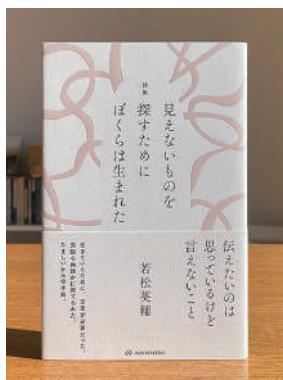
本の奥付やカバーに載っている「著者プロフィール」は多くの場合定型ですが、山崎さんのそれは折にふれ更新されていて、新著が出るたび読むのが楽しめます。
山崎ナオコーラ『魔法のつららペン つららペンと氷の国』(静山社)

作家の
山崎ナオコーラさん



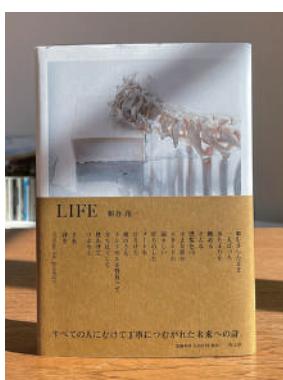
2017年に徳島県立文学書道館で開催された「吉村萬毫 意味のない美しい夢」展を見に徳島を訪れた思い出はいまも鮮明です。吉村作品の中で私が偏愛している小説は『虚ろまんていいく』。
吉村萬毫『うつぼのひとりごと』(亜紀書房)

小説家の
吉村萬毫さん



詩人としての顔もお持ちです。私が初めて若松さんの言葉に接したのは『悲しみの秘義』(ナナロク社、のち文春文庫)でした。10年前のことです。
若松英輔『見えないものを探すためにぼくらは生まれた』(亜紀書房)

批評家、随筆家の
若松英輔さん



地元福島の新聞で15年以上エッセイの連載を続けておられ、『エッセイ三昧』(田畠書店)というご著書も。個人的には10年ほど前に和合さんの朗読を聴く機会を得て以来、詩のとらえ方が変わりました。

和合亮一『LIFE』(青土社)

詩人の
和合亮一さん



長年雑誌を読むうちいつしか名前を記憶していたライターの方が何人かいるのですが、渡辺さんはどんな記事を書かれていたかまで鮮明に思い出せます。
文・渡辺尚子、写真・高見知香『東京、あこがれの和菓子店』(淡交社)

編集者、ライターの
渡辺尚子さん



うれしさ、心温まる記憶、懐かしい風景、かすかな痛み、複雑な思い。37人が大切な記憶を持ち寄る、書き下ろしエッセイ集。

牟田都子 編『贈り物の本』(亜紀書房)

校正者の
牟田都子さん

ご紹介した本は、

お近くの書店、ネット書店でお求めください。



株式会社 亜紀書房

〒101-0051 千代田区神田神保町1-32
TEL: 03-5280-0261 Mail: info@akishobo.com